菊亭晴雄
靜校閲
柳窓戲述

明治新話 抱腹奇談

發兌 東京 松江堂

○明治新話 抱腹奇談

○坊主

開化を氣取る坊主の文言

本堂の椽より敬しさる小兒れ穢布も未さ乾かざれども、出入の着屋は、既に夕揚りの松魚を擔き込んで庫裏より刺身を造る用意あり、住職の袈裟は衣架にぶら下りて表に僧態を示せど女房の帶其傍に横さはりしを如何せん、後家寺參りに來れど、女房頗る嫉妬を起して坊主の應對懇ろに過たりと罵る、女の多き説教場にと坊主故らふ容態を賣りて氣取るあり、末世の佛法、已よ腐敗して用もる所なしと雖も坊主猶は飯の種と飲代とを失はじ、酒を盤若湯と稱し章魚を天蓋と名けし時代を愚かりと誹り鰹節を色文とし鰤を躍兒と

言しい未開の者なりと笑ひ己れは文明開化の坊主と思ひ誤り、今日も女房を相手よ一杯飲あがふ例の自慢話を「お梅やコレお梅や一寸戸棚にある精進物を出して呉んなイヤ毎度も言事だが世間では未た精進物を出すから可笑ア昨夜も法事へいつさ所が亭主は流石に開けて魚を出しさうな氣色サ所が婆アめが方丈さまは何魚をあがるものか飛だ事とト言てとう〳〵精進づくめで酒を出したやつサ、それもいゝサ愚僧は精進でない方がよろしいとも言悪いから終味もない汕揚や燒豆腐で往生して歸つたが實に未さ開けねい奴の多いにゝ困るヨ其はさうと前夜の謝義イヤサ布施はいくら有たへ己は何でも一圓だろうと思つたが二圓札だやァあるめへ何二圓だト其ア豪盛味かつた此の

中で湯衣を買て呉と、よ云〳〵一圓と思さやつが二圓なら湯衣一枚承知〳〵ヲット今一本懸玉へ今日の刺身と素的に生がいゝ一圓の所二圓と相成た所で今一本飲サ、ヲ、ろうか何附屆け許りだトどを〳〵本堂へいつて過去帳を持て來いチイと來た日本橋だつけ通町の昔しれ過去帳い附込だから索引に面倒だ區分けが町で分けて置ばいゝ何々嘉永三年辛亥六月廿六日、呑倒院卒中信士享年四十五歳俗名大酒屋飲太兵衛是だ〳〵辛亥でい三十五年の回忌だヲイお供の衆承知云ましたト言つゝ小さい聲でお梅お布施いくらだナニ五十錢だ些ト中位だがよ云〳〵一章お經を誦でやれば濟む事だドレ一ッやらかすべいかト衣架に掛て在た衣を取て一寸引かけ魚と喰た儘で其上酒の香のヅ

〳〵するよりも一向頓着せず本堂へやつて行て先ッガア〳〵〳〵と鳴し、本尊の前に坐りて經を讀んとするとき此ふいかよ木像ありし如來と俄に手を伸して面にかゝりし蛛網を取り自ら肩よ積りし塵を拂ひつゝ、汝ち生臭坊主蕪く事なかれト一聲發しなれも坊主大よ仰天玄ハット平伏しよる儘頭も上ふざる所に如來カラ〳〵と打笑ひ、其方近ごろいよ〳〵心得違の廉之をあるよ付今日は幸ひ暇の樣子故申聞る事なり、一体坊主ぞもれ不處存は獨り其方れみよあらを近頃見聞そる所の坊主共多くは不埒至極の者ども而己なをど差掛り先つ其方の身分ゐ付て申聞そ可し其方先年大黒と稱ゑて女を引込みし事ありしが間もなく表向の女房となし二人の娘を產せたる儀に付申聞すゐり

一体肉食妻帶と申事い誰の了簡にて致せし事なるぞ其方如きに必す六根清淨かれと申譯にい無レ之、無量義經に示せし五蘊、六入の敎も實い其方等に於て心得ある可き事なれど斯る深意は馬の耳に念佛とやら申聞ても益なけれど先つ申まじ、此事は申さをとも其方自ら女房を持ち魚を喰ふ以上い自ら心得ゐくてと相成らぬ事ゐるが何たる了簡よて肉食妻帶いたしたるぞ政府より詔されたる故と申かコレ其の了簡が大なる心得違なるぞ政治と敎法とは丸で別物にて有る事を知ふぬか、政治は形体上を支配する者よて敎法は無形れ心を支配するものなをが敎法の事い政府で何と申ても一向功能いなたものなり、良しや政府で彼是申たりとも敎法上の事い他の干渉を受て兎や角す可きも

のよは非す、況して肉食妻帶の事い政府より斯々せよと申立たるにいあらで、自今肉食妻帶勝手さる可しと申せしなり早く言を從來僧侶ふて女犯れ事あれば破戒の僧とて寺を追拂いれさる事あれど是よりい勝手次第にせよ女が持たい者は持可し魚が喰たきもれい喰もよしと云ふ主意にて只た禁する事はせぬぞトありしなり、然るに此の勝手次第さる可しと言る達のあるや怡も百日も飯を喰ぬものが俄に振舞よでも呼を去如く其方等爭ふて女を搜し互に後るゝを恐を女房を持ち又た隱し置たる大黑などと公然と女房にしたるい何たる醜体そや、是は妻を持可しと命ドたるにと非を若し命せられさり迚て宗旨よて持まとを許さぬ上と決て持可きよあらざるを其方等最も得意よて喜

び居る故に西洋人あぞよい甚た喇弄せらるゝ事なり其而己には非ず坊主の身にて揚弓場をひやうし又い藝妓などを買ふ者あり、常にい世の風潮よ動され利益を得んとする心を以ていろ〳〵の事ども企て及ぶ者も少なからず今日の坊主い俗と相近き事甚たしく、其上人よ坊主と思いるゝを耻て頭の毛を少し長くし、ゑが栗頭で羽織などを着し西洋傘を携へさるも多し、説教所よ於ても其方等い教理を説く事をせで落語をなす馬鹿ものあり坊主で有なゞら神道にまぎらはしを言を吐く者もあり三條の教則の主意を取違ひたるなる可をど必竟無學文盲れいたす所大業、小業の區別も知らぬ馬鹿坊主、後家でもせぶりて酒でも飲ん事を專一と心得たる不埒者なれば、見よ

見よ其方等と西洋より入りたる耶蘇教を邪教の異端のと惡口をながら耶蘇教は逐々よ殖るを見て之と競はんとする元氣もなく只夢暗と排撃せん事を欲し理も非も頓着せずゐ罵るのみあると何等の無分別ぞ、坊主の中よて洋學でもなし耶蘇は教典とも渉獵して然る上に教理を爭ふ程は人物あらば喜ばしき事なをど坊主は中よ斯る人物い十人と有まじ皆な新約全書位を一寸見た許りで皮相の排撃をなさんとするゐ過ぎ西洋人ゐと却て佛教と學び其方等より博識の者多くあるぞや、教法上よ於て不信切ある事斯の如しいかんぞ佛法の弘まる事を望む可きや、且つ其方等は卑屈の根性失せやらぎ常よ政府の命を怖を教祖の教より も難し有思ふばいりなる所存なるや明治五年の十一月僧侶

の托鉢を禁せらをたる時より今日まて托鉢いいたさをに有なゞふ一昨年托鉢の禁を解をるや否や忽ち例れ乞食根生を出し恰て葺菌の行列と言ふ体で往來を流して歩き戸毎に錢を貰ひ廻るい何事ぞや是の事を强ちよゐしゝと言ふに非ぎ政府て禁ぎれば止ぎ解ゐば出掛る何事も形以上の支配に左右せらるゝ事の醜きを言ふなり然して其方等近來総て世の中の有樣よ化せられ俗人と交りを結び利益のある事業などなさんとそる心掛も有る樣子をるが出家の身よは以の外の事あり何事も法師と言ふは西洋より來て居る傳教師なぞの如く又い古への德高き法師の如く世の利益世界を放れ道德一方の心掛てあくば弘教は叶いざるなり然るに何ぞや寺れ樹木はいろ〳〵の名義を以て伐

り拂ひて己が利欲とし、本堂寄進と号して勸化したる金に
て公債証書を買ひ、朝夕に酒肉と食ひ女を抱きあまつさへ
後家を欺して臍繰金を巻上んと欲するなど重々以て不
埒至極、其方如きい目下に八寒八熱の地獄に陷る事疑ふ可
らず猶は申聞る事なれども最早口も勞れたるば他日の事
とせんト宣へつゝカラ〳〵と笑ひ玉ふと見れも早や本
堂の障子ゑ月影さして隣り寺にて八時を報ずる鐘ゴウー
ン、漸く八心地に歸りて傍りを見れば女房のお梅が「あなた
夢でも御覽あさいましさう

○擊劍　流行に浮れた若者の擊劍

お面お小手參つた〳〵「お突ー「どつこい當流には突は
お坐らぬ「お胴へ參へりや云た「どつこい然うはいゝませぬ

「先生今一本願いませう「サァお持ちなせいナイと來たハア
どつこいお小手ーと、なんの其樣事でも人は斬をませぬイ
ヤホァ一本お胴ー「お見事〳〵中々御上達で五坐ります
と此はいつくゝ知ふねども近來れ流行よつれたる劍術の
稽古場日々數十の門弟詰掛け其の試合もそさまじき迄勇
ま云く、折しも入來ると近隣ゑ住む老人宮本先生とて昔し
と德川の旗本、北辰一刀流と東軍流の奥儀を極め兵學も佐
久間流を極め一時は千葉周作の門人中十弟子の其一人な
り「ヲヽ諸君御精が出ますな小林氏の構ひ中々よくなりま
した然云右の肱が餘り張過るや宮だ中山氏いよく上段に
取りたがるが未た〳〵上段は損で有ふ矢張りセイ眼ゑ付
た方がよろしい些と腰がふゝ付やうだ最も体を定めるが

よい昔云と違て今の稽古は樂あやうよ見ゆるヲット其の面を打たのはよくない太刀だ、どうも太刀を逆に取て打ちらいけませぬ眞劍で有ふものあら今の太刀でも迚も切れますまい万一横に拂はれたあら刀を振落されて飛だ事が出來ます何でも人を打よりは打れぬ要心が第一で有る已と空虛よして敵を打と兵家でも忌む所であるト稽古を見ながら講釋をして居たるが早や十二時とありて皆々畫休みとなをば老人例の如く話と初める、一体今の若い人々が劍術を學ばるゝと如何なる了簡であるやらん愚拙などよと一向分らぬ事なれど概た健康上の注意であらふ定めて運動のため二ッには筋骨を堅ふする心掛と相見ゆるが最も然る可き事と存ずる、然し運動のため而已あらば強ち劍

術に限る譯でもあるまじ弓は胸と腹とより氣合をあめて五体を定め右手、左手を伸して頗る胸を開た至極よき者にて是は敵手なしに一人で出來る藝故甚た樂みでよし、槍も又た運動には最も妙よて殊にシゴキなどゝ一人よても出來て体の爲よよし柔術、棒、居合、長刀、いづれも運動よはよし強ちよ劍のみよは限らねど然るを今時、弓を射る者もふく又た槍を振舞し長刀を以て拂ひ立るも何とやら迂遠らしくも思はるゝ乎、柔術も格をのみ取りては表裏とも角力の雛形を見する樣なものゝ淺山流かどや眞揚流などの試合を專らとして絞り競をするも些と面白くない譯ある可し、所が劍術を心得て居れど獨り運動れ爲のみにあらで第一身の要心よなり強盜などの入りたる時や途

中山道などにて不意に賊に逢たる時の心構ひともなりて殊の外に有益の者なれば底で學ぶるゝで有ふシテ見をも運動よりも身れた。玄。なみ。と云ふ點に心付きての稽古と相見ゆるあり、扨て武道の事に於ても拙者も國許に罷在る頃い一通り相學び太刀ぬく業敵をふせぐ術、など少々い心得われど兎角生物識りの若者と却て身に害のある者あり、先つ柔術を稽古玄て表の格を二三十本を心得れば早や人を捕て投て見たき心持となり朋友などと話をするに第一に柔術の自慢、どうだ君と僕で一組打やらか玄て見やうか抔ト言つゝ不意に起て取て伏せたき心地出て來るものなり其而已なをを往來を歩きても何とあく氣詰り強くなりて往來の絶へざる所などにて誰なり投て見たい抔と云ふ不

了簡を生し却て先方が名人にて己をは手もなく投付らるゝなんと大なる不覺を取るもれあり、劍術も其の如く初め形を覺ゑ其後三四ヶ月も學べい先つ素人と試合しても必ず勝つものなり素人と第一面を冠りて先が見へぬもれなれば三四ヶ月も學ぶ者には手もなく叩かれるに相違なし玄すると早や自分と先生に成た心持にて、早く泥棒め這入れかし、吾れ一刀ゐ斬て捨て手並の程を見せて呉ん、ステッキの中にい眞劍と仕込を置ざれば急場れ間にと逢難玄などとて大平無事の今日に早や敵軍でも乱入ゑ及ばん樣ゑ心得るものあり是を生兵法大疵れ基と言て以の外の儀なり敵と、戰ふにも術も專要なれど第一は膽力なり大坂夏の陣に鴨野口と守りたる隊長穴澤頼母と言は長刀の名人にて

秀頼の指南をも勤め當時天下に幷びなき達人なれども戰場の働き偏に膽力よりあれば強ちに藝のみと以て勝つ事とは定め難しされば穴澤程の上手も上杉方の坂田采女と言者とわさり合しが采女と左程の上手とも名人とも言はと の士にはあらねど誹信以來戰ひの場に於て膽と練りたれば度胸定りて難あく穴澤が長刀を拂ひ落し組で首を取りたり近頃櫻田よて水戸の浪士井伊大老を討取りしときの物語ふ付ても亦た膽力の藝よまさる事ゝ知れて居るあり十七八人にて井伊侯が數百の行列へ切込み日下部三郎右衛門初め即坐よ五人を斬捨て深手を負せたるもの櫻井伊三郎初め二十余人、然れども浪士れ中よて戰死ゝ稻田重藏と云老人一人のみにて外〻ゝ深手淺手を負ふ者七八人な

り浪士の中齋藤監物、佐野竹之助、黑澤忠三郎、杉山彌一郎、森五六郎等ゝ何れも劍術れ達人なれども却て深手を受て問もなく一兩日中に死去せり、中に大關和七郎、蓮田市五郎、森山繁之介、あどと劍術とて碌よ出來たるよもあらを其身分とても同心、手代あと言ふ輕き者よて十六七才より役所の見習となり此とき廿二三又ゝ廿四五なれば武術と學ばずと申てもよけれど何も膽力の大あるより櫻田わてゝ目ざましき働きあとて多く敵を斬りたれど手疵ゝ少々あと當今も存命よて水戸に居る、海多吹之介は櫻田れ一人なるが其場の樣子を承はるよ何でも膽力ある者の戰ふを見るに頻りよお面お小手などと聲を掛け、又ゝ〆さなど〻呼はり甚た威勢よしいりに藝が出來ても膽の小さきもれは何

分見苦しき休よてゞゴ〳〵する故多く疵を受さり、佐野が一番よ元氣がよくて目覺しかりし、總て藝よりと膽力の緊要なり、さて皆々方が劍術を學ぶゐ一ッ心得可き事あり、兎角に少々覺ゆれば危況よ近寄りさゞる者あるゞ是ゞ不覺を取るの基ひなり、昔玄上泉伊勢守の弟子に塚原卜傳とて當時比類なき劍道の達人ゐと、卜傳が家に一の太刀れ秘傳とて世に珍らしき秘法ありしゞ門弟の中誰なり術れ達せし者よ傳へんと思ふ所に高弟の某ゝ最も早業の達者ゐて數年の丹精現れたれば此者よこそ一の太刀の秘訣をも傳へんと思ひ、卜傳が知己の人々も亦彼あらでは此師傳を受る事ゝ得せじと評しゐと或時殊の外に跳る馬あり玄が卜傳の知己の者の門よ繋ぎ置たり其とき高弟の某は何心ゐ

く馬の後を通りけれゝ忽ち跡足を揚て蹴さりしを高弟ゝひふりと飛退きて身に當らぞ之を見たる人々ゐれ、早業かゐ流石ゝ塚原の高弟なり彼人ころ一の太刀の秘傳を受るも耻玄からトと口に賞讃し其後卜傳よ逢て高弟某の早業實に目を驚し候、前日跳馬の後を通らをける時云々の振舞ありしとて語りければ、卜傳さてと未た一の太刀は授け難しと言れける、語りし人々大に不審り五六人相會して密よ言けるゝ塚原氏の口上心得難き事なり彼の高弟の早業ころ世ゐ類ひなゐ事なるに塚原氏之を聞て一の太刀の秘傳授け難しとゝ何事ぞ思ふよ塚原氏已が及ゞざるを知て思憚らるゝゐふん塚原氏の早業一見せるところよからんと て例れ跳馬を狹況所よ繋て卜傳を招ぎ人々陰に隱れて見

て居たり、ト傳馬の近所よ到りて尻の方へも寄らぜ三四間遠くを廻りて通りけれぞ人々案に相違し扨てト傳よ向て其子細を問ふよ笑て曰く馬い跳るものと知ふざれぐところ怪我あやまちも出來るなき、門弟ど尻の傍を通りて跳られぜい不覺とや申さん馬い跳るものと知らぐ近寄ふぬが良ひあり兵法にても斯る事は心得ある可き儀なり、さをば是等の心得なひものにい一の太刀の秘傳い授け難しと申したるありト答へけるとて、各々方とても少許り劍術と學びてよしあき勇氣を出しあば矢張り生疵の本ある可し劍道の要意い第一に身れ衛りとなし第二にい害を防ぐの要となし次に敵を討つためなれど先つ〳〵身の衛りと心得なる丈用ひざる樣よそるがよし、其れ中にも巡査、兵士なぞい

職掌なをも格別各々方は素人の身として出精せらるゝも左までの益も覺ず其れ勉強時間を半ば減ドて學問に出精致されあば幾許の益にあるやも知れぜ、項羽ど劍は一人の敵學ぶに足ふをとて万人と敵とする兵學を修めたりと聞く、只今各々方が學ぶる〻劍術も身を衛ると運動の爲とよ過去其れよりど何事に就ても必用ある學問をも出精せらるゝがよかふん、愚拙武術に及でど左まて人に後をを取ふざをぞも學問をせざるが故に今日の世の中に無用物視せらをく武藝の思いれ外役に立ぬを悲めり今の若さで余りケ樣ある事よけみ出精せらるゝも些と賞よくい儀で五坐ると長々しき老の繰言に今まて聞て居た連中も欠伸と屁のみゴウ〳〵たり

○客商　爪で火を燈す金滿家の胸算用

ヤレ〳〵當月も最ふ二十八日と成たが晦日よ這入る元金と烏金屋厂兵衛が五十圓と此利息が躍りと合て六圓八十錢宏や底で元金の五十圓を彼所へ廻そ事とそれば遊べせそに濟む、イヤ其れ〳〵麹町の口も先日の利息を入れなかった彼人い時々滯るゞ心配ゐ事だわい其いさうと已も二十の代ゥら丹精して漸く一万圓と云ふ高よ成たが當年と是非一万三千圓と云ふ高に宏て見なけれバ面白くないぞ〳〵公債証書のお顔でも拜見しやうハテ何時見ても金貨と言ふやつは惡くないものだ桐の箱に二重に入をて置バ羽毛が生たとて飛出ゑ苦勞はなし、ト、公債証書どれ一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚トハテな九枚有た筈だかドレ〳〵紛失では有まいコレ〳〵眼鏡を以て來い早く持て來いドレ一枚、二枚、三枚、四枚、五枚、六枚、七枚、八枚、九枚ヤレ〳〵安心〳〵以上合て三千二百圓と底て貸付金ゲ二千八百圓と金貨ゲ千五百圓、と銀貨が八百圓、屋敷が三ケ所ァ、段々殖て來るが屋敷の方も今少し地代を揚てやりたい者だ表通ゞ一坪十錢でい安い十三錢と宏ようかイヤ十五錢と宏ても宜ろう、若し家屋を毀して外へ移るなゲト言れた日にやァ厄介だが四方やそんゐ事も言まいか何にしろソロ〳〵直上けと出掛ぬゞ面白くゐい然し今の地借めら權利だの義務のと扱して惡く捻た事を言、たがるさうだから地代が高の不相當のと扱して騒ぎ立られた日よい面倒だナニぐづ〳言た所が地主の權で頭から押へ付て仕

舞ふ迄の事ッ其よしても金利れ高いのは何よりも喜ばしい譯ッナニ〳〵横濱から利子を持て來たトフム受取て遣ッせい何か進物でも持て來られたかナ何も持て來ねいと其は不行屆な事だ少し小言でも言てやるがいゝ來月から利息と二十五日に持て來いトさう言ゲいゝ氣の利ぬ男だァゝ忘れたか客やコレ今月の小遣帳を見せさッせいドレ、是い米代か先月よりは米ゲ多く入たやうだナニ晝飯を出しと客ゲあると其樣義利だてと止にさッせい晝時分に來たとッて丁度〳〵に飯を出す、家が何所よ有るものか此れ不景氣れ世れ中に義利も糸爪も入たものでとない然て魚い月三度と極た筈だゲ今月は五十錢とある五度買たと見へるナニ下谷の先生ゲ御坐つたとき取たト是と去たり己が客れ前で魚を取れと言ても手前ゲ氣を利せて今日い「シケ」で何も五坐ましませんとか何とか味く調子を合せて呉あくていいけぬでいないゥ瓜揉位で澤山だかそしてマッチなぞも一ケ月よ三ッとと多過る塵つもを山となると言譬もある三ッで二錢五厘か三錢でも一年には三十六錢十年にい三圓六十錢となる氣を付さつせい洋燈も宵れ中は二ッ付るもいゝが九時にかつたら一ッに去て寢ると死い消ゲいゝ一ケ月に八合つゝ消費てい溜るものでいるい家内五人でと十二圓位であげたいものだゥ十五圓つゝも掛てと堂も困る少し氣を付さッせいト口から泡を吹て小言を言とよろへ學校ゥら歸て來ると小供がお父さんお前いつも小遣ゲ入り過る〳〵と言が金い世間の流通ものでいくら

遺てもよい云やァ有ませんゥお父さんがいくらお金を蓄ても死でいく時ゴい六文きゃ持ていきまずまい生て居る中味い物を喰て樂ミゴ思ひをして金い澤山遺さぞとも私等ゴはお金を掛て學問をさせて呉れゝば却て私等の爲ゴ成りまするお金や家屋敷ゴ有形の財産と言ますけれど其れ丈の限りがありまするぞ學問と才識と無形の財産と言て限りが有ません一万圓の働もするし五千圓の働もいたします爪の先で火を燈す樣な苦しみをしてお金を蓄なさるよりと余り無理な事をせぞに少し宛なりとも金を拵ひ貧究の者や病氣災難で困る者ゴどゴと施しておやりゴさるが宜ふ侍坐ゴませう家の身上ては一ケ月に百五六十圓の利息は這入りませうゥふ月ゴ五六十圓の暮云をゴし体の樂をなさる方が能かと思はれまを世間てはゴ父さんの事を頑固だの吝嗇だのと申まそる「ナニ頑固ざと此の餓鬼め學校へ出やがつてゴらチョベコベ〳〵と饒舌りやがる已るくロ才でゴり振りやがると是から學校へ出さぬぞソレざゴら頑固だと言ふれて有ます「ナンだト此の野郎ァ、今の小供と親を馬鹿ゴしやァがる

○放蕩　迷ひ込たる放蕩者の熱心

ハテ母さん其樣に小言を言なさる事もねい親の物ァ子の物子の物ァ親の物サ親父が嗇さ金を子が遣ふに何も不思議と有ますめへ今ゴ親父が死ば釜の下の灰まて僕がもの其時ゴこそ自由の權ゴ、親父がグズ〳〵言たゥれ母さんゴ傍から何とか取成す可しサれ前までゴ親父に左袒して

放蕩だのあまけだのとれ呵り頂戴でと實に立瀬がないわいなァト言ふ主義だせ僕達て友達の交際もあるし一ケ月に十度や十五度吉原へいつたつて左程金も遣ふめへし芝居だつて月に三度や四度觀さつて甚た多しとも思とないし譯其れに度々れ小言でも痛を入るチ、ナニ酔て饒舌るト是いえたりれ母いつ酒を飲せなすッたへ憚りあがらサ由良の助も言やした飲だ酒なら酔さいなるめへがチか母さん飲せぬ酒に酔たものい有ませんせ、憚あがら此酒は吾輩が自ら召上た酒て母ゑや人の賜物よあらずサ狂言なふお下に五坐つて一ト通りお聞下たさ一れと言ふ所だが先つ聞玉へ前夜姉の所へいきやした所が姉がサ姉子が言ふにわお前も廿五になつて何時までぶら〳〵ゑて歩くのだ兄さんも心配ゑて余り放蕩なら懲治監入りと言て監獄へ願を出ゑて獄へ入れて懲ゑて貰ふとサお母さん何と酒落臭い事を抜すゑやァでせいせんか何ぼ姉ゞ官員の女房に成たとて其樣よ亭主風を吹せて兄さん〳〵と抜す事もねへ姉の亭主だつてどを程強いものか今免職でも喰つた日にやァ木から墮た猿のやうにマゴ〳〵ゑて己れ家へ來て救て呉ろと言ふよ違ひなしよ、女風情の分限て僕に向て意見を言ふだけ可笑のサ、エお母さんお前も兄さん〳〵と言て賛成の組だゞ官員なざァ憫然あものサ碌ろ朝寐も出來ずに七時とか八時とかにい靴あどを穿て出掛やそヨシカ此の炎熱時分に土藏見たやうな獄中もよろしくと言う白壁の中で何と書くのだろ一日參階よコッ〳〵やらかし午後の二時

か三時とかに成て漸く歸りやを歸たとて寐酒一杯飲位ゞ此上のない樂みで毎日〳〵替りのない女房の顔を見て嬉云がつて居る其もよしサ偶〻つき合て酒をのむサ其時だつて上役の者よやァ頭が上らず胡坐かいて手を叩ながら酒を飲む事も出來ないと言ふあれな話よ、底へ行ちやァ僕なぞは自由なもれサ親父の前てあそ小言をゆわれ何の蚊のと六ッかしいが何所へ言ても憚りながら大モテよ藝者でも都間でも僕れ顔を見た日ゆやァ一町も先あら土下坐ァ云て御前〳〵と言も云ないゞ若旦那〳〵で其のもてなし大方あふずナント耐へらをた者でハないテお母さん何も泣く事ハ有めいへッ女程意苦地のないものハ無いせ愉快な話を聞て泣くとハ何とした事だ舊弊の人物と是だから困るコレお前はよくも其樣な自分勝手と言をた者お前ゞ遣ふ錢ハ誰ゞ儲さとお思ひだ親父どのハ寐る目もねずに働てお金をためるのも皆な子供よ讓りたい許り其も少つヽも余計に讓たなら仲間れ者にも鼻ゞ高いでゆろふ、出來そこなつた子程可愛いものので朝ゝら晩まで放蕩に身を持くづし親の金を手當り次第に遣ひ散す子供に猶此上よ家も屋敷も讓ろうと言ふ親の心を難有とも思ハず、出放題の泰平樂と言ふとと何としさ心ぞや、夫婦して稼ぐのハ皆なお前の爲めに金を儲けたい許りいかに我儘氣まヽでも少は親の身をも察して手助けよハなふまとも少し辛抱して家に居て呉る氣はならぬか、責て清元を習ふとか何を稽古するとか言ふ位の道樂あら底に了簡の付やうも有けれ

ど一日一夜と家ゑ居た事はあくホンに何とした不心得で有ふ「チット皆まで宣ふに及ばぜ其式の事い百も承知二百も合點親が身上を拵て小供ゑ讓るに世間並の通り文句一向に珍らしくも御坐なく候サ、ヘン憚ながら去りながらだゞ親と言ふ者い子れ爲に働くゞ理の當然是い天下の御大法働くゞ忌なら最初ゥら子供を拵へぬゞ上分別何も恩ゐきせて子供の爲に働くの皆んな誰ゞ爲と思ふぞなんどト仰せふるゝゑい道ぢぬ事サ、其いまつろれとして今日い改てお母さんゑお願ありサ權太の申分じやァねへか今度ァ實にお母ゑ別れる樣ゑあるめへ者でもあしト言ふ事件だゞナンとお母さん僕ゞ可愛いゝと思ふなら相談ゑ乘て呉れめへか「ナンの毎度口先ていゝ加減のだまし事許言ても然欺されて許りい居りませぬ「お母ゞさう言ふなら致方がねへかふ僕も度胸を極て一走り飛出そか、流行の情死でもせずば成ますめへナニ其樣に驚く事もねェまそまいどうせ欺言にい乘ぬの何のと言、なさる代りにやァ子供は堂あつても頓着はないと言五了簡だろう「マァお待あ何の事ゥ知らあいが親れ名でも出る樣な事をされては「ソー底だからお母さル相談に乘ておくんなせいト言やしたのサ外れ事でも御坐りやせんが實い僕が馴染みの女の事で御坐りやす「ァム其の女を女房にでもしたいと言のゥへ「ナニ僕が女房にしたいト言譯でいないが少しお恥げれど先でい是非女房にあらねバ成ぬ若も女房にせぬならば一處に死てお呉れ其も出來ないなふ何所へなど連て逃てト言やすが打捨

て置たあら何様お事を惹起かも知れやせぬお母さんが承知して女房にして呉れればよし若玄其事ゞ叶はぬ時ハ一處に死でやらねゞ義理が立ちますめへ「ソリヤまア眞の事かへ」「ナニ嘘といゝませう面白もおい事を」「コレ能くお聞よお前もまアよく〳〵生れ損たものではおいろ」「エ、最ウ其の意見と聞飽やした釋迦が意見をしやうが孔子さまが小言を言ふが是許りは止らぬ〳〵ト言ふ所へ親類の佐治兵衛入來り委細の樣子を篤と聞て「ヲ、其の願ハ易い〳〵女郎を女房にする人ハ世間にいくらも有る今の官員方ハ藝者と奥樣よして居あさるお前が女郎を引込む位の事ハ小言を言ふ丈の事はない萬事此の伯父が呑込ミやしるが佛て女郎ハ相違なく引取てやるが此に少し己の言事を聞て貰とねばならぬ僕ゞ願せへ叶て下さるなら「エ、サ萬事呑込ミやしる底で己が頼みと言と外でもねいが女房と持た迚夫婦の中が睦敷なくては家の爲でおい男女の間は互に信實と本とせねハ中よく暮すと言ふ事には行ぬものゝ玄や其信實の教を聞には耶蘇教の説教を聞がよい夫婦中をよくする爲じや是もお前の爲を思ふれで有る何でも毎日毎晩耶蘇ハ説教を聽聞し凡そ五十度も聽たなら直に己が金を出して女郎を引取て遣るナンと少も早く聽て歩くゞよい此の聽聞をせぬ中ハ決て女郎は受出してやらぬ」「ナンれ説教を聞く位の事ハ屁の屁だろんおら今ッから聽初めて直に五十度聽やせら」「ソンナラ少も早く」「ヲット合點ト出て行く」「左治兵衛さんの御心切と難有ふ御坐いますが女郎の

事も何外受出しましてゝ「ハテお母さんお案ぢなさんな然言てゝ悪れ口だが御子息は悲い事よ學問をせぬから女よ迷ひ方も早い是が小學校程の學問でも有る日わは今の様に放蕩ゝ云ますめい舊幕の時代よゝ文盲人が多いから放蕩無頼の息子も多りつたが今の若い者と其れ〳〵學問もある上に第一獨立とか何とか言ふ志もある其で親に心配を掛る様な者も少ないの云や或先生れ仰るに親の意見も他の教戒も用ひぬ者ゝ教法の力を借りるより外ないと申ましたが、今日よ成て學問云ろと言た所ゞ聞入も云ませず、寺の説教でゝ昔から聞慣て頭ゝら笑て掛るゝら功驗がなし底へいつてゝ耶蘇れ教が一番よい今よ御覽なせい説教を聞く中よゝ自然己の非を悔つてア、今迄れ不身持ゝ全く自分の不埒から起たと言ふ事を知とやせうから少れ間だ待てお出なせい後悔が出たあゝ外よよい嫁を貰ておやりあさるが宜ふ御坐いやすト言つゝ歸り行く期て十日許り立て左治兵衛「どうだ説教を聞たかヲ「へイお伯父さん僕ゝ最ふ女を受出するゝ止ませう「ソリやまたなせだへ女郎を受出も約束でとないか段々説教を聞まして神れお惠みある事を考へますれば眞よ勿体なくあります是かゝ女郎買もよしにし、酒も飲ますまい、僕ゝ耶蘇教へ這入りまして信心を致す積りで五坐いまを「ハ、ヽア其んあら善心お立歸て呉れたゝ「ハイ最ふ眞の人間よ成ました「テモ耶蘇教ゝ勤有いものゝ云やナア

○究職　お諭と喰た官員の瘠我慢

頂戴たる黒れ帽子い高しと雖も其鼻到て屁込み、黒塗れ車殊よ輝くと雖も其顔色甚た青し、汨羅よ遊ひさる三閭大夫、門前拂ひを喰たる盛衰記の梶原も斯くや有けんと思れて心の中ぞ哀れなり、車の上で獨ぼつ〳〵と考ひけるい、吾れ長官のお宅へ度々行き權要よも屢々進物あぞ致したれ心尤も昇進す可き筈なるに今日のお諭しいハテ合點のゆかぬ事なり、四方や人違ひでと有まい親展書とあるから何の御密談の次第でも有かと思ひバ都合があるら辞表を出せとい難有ない御内諭然しどう云ても人違ひかと思いれるがまさか人違ひでい五位らぬかト聞く譯にも行ぞ去りとて翌日は兎を喰ふかと思ひで耐らぬ譯だ此の車ゐ乘て歩くも今日限り知らぬ事とは言ゐがら車夫めが威勢

よく走るに付てもア、耐らぬ〳〵其はさうと權要のお花もかゝる事の有ふとと知らぞゐ居るで有ふ月給ぞあがつた日にい權要も抱てと置れぬ可愛お花めよ暇いやりたくあいが去り迚一文も取らずよは權要も置れまいハテ困た事に成たなアと太い呼吸をホッとつく折云も車い玄關れ前に着ぬ、兎を喰ふ体を見せては常々高言を吐きたるに不似合なりと思はれんゝトグッと氣を替て意氣揚々「只今ゐ歸りで五位いますか貴君お顔の色が平世の樣で御坐いません御氣分でも悪ふ御坐いますか「ヱナニ何とも無いコレ早く酒を以て來い「あゐた先刻より鼻本四暗さんがゐ出て待つていらッゑやいまも「ッム然か此方へお通し申すがよい「イヤ是と御主人先刻より御歸りの程奉レ待レ候ッ別義でも

之なく日外御周旋願ひたる一條なるが彼者頻りゝ小生方へ參つて七等属あり八等属あり又た十等属ゝても宜敷き間何分至急に願たいとの事其ゝ就きての事と申でゝあけれど明日ゝ是非御賁臨を願ひ新富座の新演劇を五覽に入たいとれ執心どうで將來は御厚情を相受る事故御近づきの爲め權妻君も御同伴を願ふとれ儀にて候いゝに午後より御散歩旁々御出向ゝなりては如何さて此程中よりお話申したる例の會社よりも是非に招待申たいとの頼み又た此程に願書を差出せど御指令向の義何分可レ然御取なしを願ひ奉るとの事にて今朝ゝ〻ざ〳〵社長參りての頼み就て近頃有名の山田先生が揮毫したる汕壽の額を一枚献上仕りたくとれ事に候が何れ六七日の間にゝ仕上る由是は餘程珍敷き名畫にて凡ろ四尺も之れある趣き一際のお樂みで五坐りやすと立續けて饒舌れど主人の腹中ムヤ〳〵して一向に面白うらず翌日免職になるとも知らず新富座の汕給のと牡丹餅で頬べゝを叩かれる樣ゝ味い話許りゝあれど是とても已ゞ翌日免を喰たゝら其れぎゝゝ成て仕舞て有ふ去とても免職の内幕を知られてゝ外聞あーゝ「イヤ毎度千萬恭ない儀なるがマッ一杯やりたまへイヤモウ今日ゝ廳中ゝて大議論ありゝ僕ゝ平世議論ゝ成りたけせぬ性なれど今日の如きは實に國家の爲ゝあらずと考いたから大ゝ長官を論破し其れ時は實ゝ局内の者耳を傾けざるはなし サ苟も忠君愛國の精神を以て見るときゝ「一身の進退あとは顧るの遑がゝいテ是れ愛國者の本分なれゝ致方がゝい

譯だが人も議論は爲に進退擧止を定むる樣に成てと何時いうなる場合で民間ゑ下るかも知れぬ島津左大臣や西鄕氏などが朝鮮の一事ゑ付て退たゑる如き政治上の改革論行れをして退きゑるゑと皆ゑ英雄豪傑の高踏勇退とも稱す可き事ゑて僕なとも亦然り今日の大激論とやらかし大に同僚を說き伏せ進んて長官に向て雄辯を逞ふしサ本官の議ゑして若し採用なくんを本官は斷然職を辭そるの外なしと明言ゑたるゲ同僚も此の一言ゑい驚きゑる容子にて密ゑ言にと君ゑ今辭されてと本局れ精神とも柱石とも賴をたる人を失ふも同然長官ゑも局長ゑも一方ゑらず心配せらるゝ容子なをを議論の採用いうんい暫く措き是非に止り玉へ君の論は頗る高尙ゑして吻を容るゝ所はなけれど目今行ひ難き事情もあれば切ゑ思ひ止れなとゝ頻りゑ勸めゑるが僕の氣質は君も知つての通り思出ーゑるい飽迄徹さねば止ぬ性故、たとひいか樣に言とも僕れ論にーて行われずを何れ面目ありて朝に立んやと言放つて歸宅しゑる所なり男子も議論をして擧止を定める樣に成ると彼此當り障りが出來るゑ今の官吏は多く上の鼻息を窺ふて自分の說なとを定める者い少ないよナニ僅ゑ百圓や百五十の月給など民間に居ても取ゑる何是れと云ふ目的もないう僕ゑそい人と違て翻譯や著述をしても一ケ月ゑ百圓位の仕事いをるゑ腕に覺のあれをこそ長官も局長も恐るゝふ足らぬ譯サ殊ゑ寄つたら翌日と辭表を出してやろうと思ふが何所ぞ君の知つてる會社か新聞社に知己と

ないかゞ當分の中少し手傳位をしてやつてもいゝテ月給もいくらでも頼着はないが成る可くゝ多いに如ぜ君周旋し玉へ是非周旋し玉へ「ヘヽ、エ「ヘヽエでも解らぬテ實の話ヵ御賊言許り御辭職とゝ其ァどうも解せませんテ何も今日一寸御議論をなそつた位で直ぐ明日辭表とお出かゞなさつてゝ早過るでゝは坐りやせんゥ如何ゐ御論にもせよ長官だつて議論位の事で辭職とお聞屈にも成りますまい是ゞ判任かお雇のは身分でもあし苟も奏任の御地位で居せらるれゞ容易御進退もなりますまいのト存じます「イヤそれも無理な話だテ官途の事情ゝ局外人ゐは譯るものでゝないい吾輩だつて己れの説の行もれぬ所ゑ浮架〳〵して居られるものか其所へ行てゝ男兒の腸がなくてゝ世ゐ立ても言甲斐なしと笑はる可し職を辭するにも諭を受て辭表を出すなぞト言ふ徒とも違ひ議論の行ゝれぬ爲ゑ退くのだから伏仰天地に愧ずヵ是非何所ぞへ周旋玄王へ今話ゞのあつた油絵なぞも入らぬが其社へ周旋し玉ひ翌日からでもいゝ隨分勉強する世平世の親みもかゝる時の事だ世是非急に周旋玄王ひ「サテはれ諭を「エ「ナニれ賜を受ましてもお當ゑは成ません

○車夫　先の見ぬ人力車の歎息

アヽームニヤ〳〵〳〵（欠伸の假聲なり）今日もまたァ。レ。だ晝寢した方が勝らしいノゥ勝公「サウよ己ッちやァまだゲンコニしきやァならねい昨日もパンドウよ「其でも勝公なぞァ車持てるうら強せいだが己等達ァ羽代丈の働

きも出來ないと言ふのどさから形なしよヤイ〳〵信州味く
やるなァ眼鏡の(眼鏡橋へ行くかと言なり)「ナニ日本橋
だ」コウ熊公この節の不景氣よ持はみ鐵道馬車ゲ直下をし
やがッたゝら猶更苦しいのたせ眞忌いましいのゝ鐵道馬
車よ數万れ人力挽ぞ干乾しよする了簡と見へるがいめい
まーい奴等アじァねいゝノッ「然うよ今に己等達の怨さで
も碌あ事ァ糸ゝ夜でも石を降ーてやるべいか「馬の向足擲、
き折てやるべい「寧その事車をぶち毀そがいゝ「それも尤の
事だゲ近來一体よ不景氣の所へ馬車と云やつか出來て昨
年の冬以來困て居る所へ今度の直下と來たゝら實よ立き
をゝく成たのだが是も馬車ゲ出來さ故だと思ひバ腹もた
つが實ゝ不景氣のせいで有ふ、然し人力車に乘る客種ゝ馬

車よ取られ今ゝら取返そ事も出來ねい譯だか此ァ何とか
工夫が付さうなものだ松平ァ士族だと言から此位の譯合
は知てるだらうお前も昔しは五千石の殿樣でも今日人力
挽よ成て見れそ己等達の仲間だ何とゝ工夫を付て此れ不
景氣を取返す事にやァいくめいゝノゥ金公「違ひねい松
平何とか一工夫して見糸へな「コウ〳〵松平〳〵と言て
呉るな矢張り千公〳〵と言て呉あゝ己だつて昔しこそ智
恵も分別も少しい有ゝ樣あものゝ今此樣身分よ成て見れ
そ矢ッ張ぞ人力挽よ工夫も何も出たものではないが、お前
達が馬車を悪く言ゝら實よ可笑くつて居たのサ「ナンだッ
て可笑いのだ「マァ少しものを積つて見ても知たものだ今
の世の中ゝ何でも珍らしい事でおくてゝ錢の儲ゝらぬ事

に極つて居る十年許り前より人力車が流行初めた時を考て見給へ其時ア東京中の駕籠屋がいくら困たか知れやしめへ其時駕籠かきの了簡では是は人力車めが出來たゝらの事だあの車屋めいめいまし い奴等だト怨だけれど時と時節あは勝をないものでとう〳〵人力車は世の中とあり駕籠と葬式に用ゐる事と極た樣あもれだが是だッて人力車の咎でハない世は開くるよ付て迂遠もれと段々人か嫌て來て少しでも手ッ取り早くてせにの出ねい方よ人氣が付のだから何程怨でも追付ぬ話よ其の証據にと横濱と新橋の間よ鐵道ゞ出來ぬいうちは馬車と川蒸氣が味い錢を取たが一度鐵道ゞ出來てから馬車も川蒸氣も上つたりで初めの程ハ小、言も言て見たが矢張り駕籠屋が人力車を怨だ

と同ぢ事でとう〳〵便利で錢の安い方よ勝をとられたのでも知れて居る、だから今馬車を怨んだ迚初まらぬ話で却て己れが働きの妨げとなるゞゞ〳〵して居る中よ鼻の下が干上る、なんでも智恵のある目の付やうの早い人間が勝をとる世の中だ鐵道馬車だつて今でころ人力車を押倒して錢を儲けるやうな者の今五六年も立さなら又た何ぢ新奇の物が出來て鐵道馬車を困らせるかも知れぬ、何でもお前達は馬車を怨む事と止て馬車が一區内三錢なら此方は二錢でやり馬車が二錢なら一錢五厘と下げ飽まで安くして敷でこなすが第一だせ直段せへ安ければ當節い直に人氣が付て己等達れ景氣を取直す樣よあるめへ者でもない、ろんな所へと氣も付ぞ鐵道馬車ごの溢れる樣に客を量つて

持て行くを見ながらグズ〳〵言ふ許りで負せやらかせ了簡のねいれは實ま意苦地なしの骨頂と言ふもの東洋の人間も忍耐心といふ者ま乏しいとつて西洋人が笑ふがお前達も笑はれる組だろう又た世の中が變化にるま就て總てれ者ゲ改り新い物而已行とれて舊物ゲ廢る之を新陳代謝と言て智惠のある人間も其れ代謝ま目を附て時勢ま後れぬ樣ま するから底で以て飯れ種に困る樣な事はないれ前達は素より無學文盲で世の移ま代りも知らせ物事はいつも停滯不動とのみ思つて居るから鐵道馬車が出來て今に人力車の不景氣に成を知らせウカ〳〵して居て今日れ困難に陷るなどいかまも氣の利ぬ話ま最少し早く心付たなら此の難澁もあるめい、良しや難澁するまもせま早く心付位の人物ゝ何とか早く商賣損をするわヤ己が今一寸計算をして見せる東京の人口ゲザッと百万として此中で日々往來を歩くものを三十万人と假ま つもる此の三十万人の中人力車に乗る客が五万人として人力車の數が五万挺とすれば一挺で一人の客を乗る割合なれど此所へ鐵道馬車が出來て新橋から上野淺草と客を送る此の馬車一臺で一日平均拾圓取上るとそれば乗客一人四錢平均一臺の客二百五十人として馬車の數四十となれと乗客一万人なり、さて人力車一挺で一人の客と當てたる所へ昨冬よりの退々不景氣殊是より農業のいろがしきより田舍より出すとすれば五万人の乗客一万人減じまりと見て其上に鐵道馬車ま一万人取られ又た馬車の直下けて客が增したれと又候ろ

二千人位い馬車よ取られたる可し左すれば人力車に乗る客い二万七八千人と知る可し、五万人の客を五万の人力車で乗るとたいどうか割合もよく成る可れど二万七八千の客を五万の人力車で爭ふていい今日の難澁よいたる事は珍しからぬ事で有ふナント口で許り不景氣〳〵と言ずよ勘定をくにも目を注て一工夫をるが宜ていないかノウ勝公「ボンニ松平の言通りだ皆な少し氣を換て人力の相場をグッと下るゥ左もあくば商賣換をする迄だ」今急よ商賣換も六かしい直を安くして數をこなすがよかろう「違いねい〳〵ト言ふ所向の方から「チイ若衆車を五挺頼むせ」へイお安くめへりやせう

○舊弊　意氣相投せし老人の舊幕自慢

是は〳〵頑兵衛さん能でさッた麻布から此迄い餘程五坐ちうにヤレ〳〵まづれ上にあされ「イヤもう人力車が夏蠅て〳〵昔と往來に車と云ふ邪魔がないうらお互なぞも道を歩くよ心配が五坐らぬが今の世れ中は人力車だの馬車のと毛唐人が持込鳶つて寔にハヤ見るもいめいましい事で五坐る「サレば何を申ても徳川様の御時節だテ御布告だとて今れ様に四角あ字をならべた事いない御家流の書て和かに書て下すッたものサか前さんも覺て居あさるだろう大御所様が薨去に成た時よ彼の御葬式あんぞい唐にも天笠ふもある者でいあい「然う〳〵何を言ても昔しの事だ正月の元日に大手御門の前の賑やかさ、諸大名の御登城なんと思ひ出しても涙がこぼれる「己も覺て居るが品川の

ム臺場が出來た時水戸樣を初め諸大名の見分が有たがヤ其れ見事と言ふものゝ家〻の旗馬印を立て數千艘の舟で沖へ乘出し所は恰で繪にかいた八島段の浦の合戰よ其れに將軍樣の五本骨の扇の御馬印、葵の御紋れ白れ御旗などが出たから關ヶ原以來の見物だとて人の出たとも〳〵常陸、下總、上野、下野、甲斐、信濃、まて聞傳へて見物に來たさうだ何でも德川樣の威勢ゝすばらしいもので有さ長州御進發もまた大した者非伊掃部頭樣が先陣次ゲ藤堂和泉守樣中にも非伊樣の赤備とて赤い旗を立られました將軍樣は白に五輪の塔の御陣羽織であつたッけ「なんでも御先備が立てから二十日許りと言ふものゝ毎日〳〵御繰出しに成つたが何十万の御人數で有たか今なぞゝなんば徵兵ゲ

集ても彼程ゝあるめい「どうして〳〵日本中の兵隊だとて二万人か三万人よ、德川樣ゝ旗本衆許り八万騎で有た御家門御譜代まて數へたら三十万人も有で有ふ何と豪盛な事でゝないか「今の世の中と何も蚊も開化〳〵と觸散し稅の出る事許り多いよゝ困る酒の稅だッてさうよ昔しは千石造ても五十石造りましたと書上れば其て濟だものゝ今で然ゝいかぬ烟草の稅なゲゝ一向よ話に聞た事もなかッたが今の世れ中ゝ十錢ゲ物を賣に一錢れ稅を取れる商ゝ一割口錢とて此上のない儲としたものだか一割お上へ取れてゝ儲ける場所があるまい物事萬事此通りだゝら不景氣〳〵の聲ゴの絶ない筈だ往來よ立たランプだとてホンに無益よ銘〻が提灯を持て歩たゝら足許は明るいし其上

入費を取れる苦勞もない道路は普請だとて杖でもついて歩けば別よ心配も入らぬ昔から往來が惡いとて躓て死んだ者も聞ぬ、煉化石だとて火事が出來ぬとも限らぬ第一地震の時い眞先よ厭に討れて死ぬねばならぬ兵隊にい鐵砲を持せて靴を穿せてもスワと言ふ時と刀がなくてい叶いぬ靴でと働けぬ草鞋に限ると言ふでとないか、鐵道が出來た便利だ〳〵と言ても時々人を引殺して大騒ぎをやらうす劔術や茶の湯や生花などい無用の者たと蹴あー付たものゝ今でい大よ流行する今よ御政治向も德川の通りと言ふか仰が出ないものでもあいお互なぢと此通りチャンと髪を結て居るうら何所へ出ても耻る事ニあいが今の人物は元服れると言ふ事もなく女い女房よ成ても齒を染ぬから問男をしても取押へる証據がないと言ふものだ何事も昔と違て氣よ喰ぬ事計りナンとお互に氣が合ぞころ斯打明た話も出來るが今の人物は氣狂染て居て話相手にありませぬ「いかにも舊平さんの仰る通りで五座ります私なぞも此年に成る迄支配人として居ますが近年ハヤレ戸數割だ營業稅だ雜種稅だといろ〳〵の名目で取立る數が多いから一々覺て居る譯にもゆかぞ其上何を紛失したソレお屆書と言ば二通も三通も入る上に書き樣がよいとか惡いとか其面倒と來たら話よありませぬ店の內へ移轉者があればソレ戸籍をどうそるのと是もまた面倒、それ上警視廳東京府やら區役所やら呼出される事があるヤレ汽たの轉だれと話にならぬ程面倒サ、之を考て見ると何を言ても德

川様の時代だ「私が家い御入國の節麹町の草創をした家筋で御能拜見にも出た者であつた麹町の太郎兵衛と言て誰知らぬ者もない舊家でも今の御時節でも何にもならぬ開化〳〵と言ても糞のやくゝも立ぬ第一株と言ふ事がか廢ざうら困るのよ」「何より錢廻りのわるいのには困る昔は札と言ふものがないうら安心でよかつたう今では紙ぺらの通用であるうら尙更不景氣ゝ成る」「左様〳〵どうしても德川の時代がよかつたト二人で互に舊弊話しの所へ隣りの小間物屋の亭主「イヤ頑兵衛さん能くお出すッたチ舊平さん御不沙汰いたしやした相替らず德川話しかチイヤお前さん方の舊幕自慢も久しいものサあんぽ自慢しても武士の斬捨を廢れたのと火事が少ゐく成さの郵便の便利が開

けたれ、往來で下坐する心配がないの、二日二晩で上方へゆかれるの、新聞紙を見らをるれ、電信の便利を得たのゐぞは明治の御代の難有い譯で有ふ、どッちがいゝと言たッて昔時の樣に少の間違でも手討だれ傳馬町へ入るのと言ふ事れあいのゝ何よりの事であろふ第一に自由と言ふ事がない時節だうらなんぼ自慢なそッてもだめた、今に國會でも出來て各々ゞ政治向ゝ立入る樣に成ると言ふ目出たい時節が來た日ゝやァなんぼ德川〳〵と言たつて糞ほどの効能もなしサ舊幕自慢もいゝ加減ゝしなさるがいゝ「自慢ゝやァねいが昔ゝ今の樣に人間ゞ薄情でない約束などを間違ふ者が少ないから裁判所も入らなうッた奉行所へ呼れて呵られゝば非で事ゞ極さものヨ今の人間と來たら口許

り達者で油斷のならぬ奴許り多い是が第一氣よ喰ぬ次よ
は稅が高いから氣に喰ぬモッと安く玄て貰いていものだ
「ハテ然言ても無理ゐ事許り昔と今は米の直段から違て居
る米が一舛百文の所を今い十錢よりか昔の稅は年よ二歩
で濟たものゐら今でと二圓でなくては釣合ぬ此の道理を
考て見さら小言も言れぬ譯「ソンなら人間もまた昔の人は
安くて今の人は高いのか「ハテ言ぞとも知れさ事昔の人
間は馬鹿で今の人間は利口よ「どうりで口許り達者だ

○博識　萬藝を知て一藝よ達せぬ人物

ハヽア此と玉樂が山水の大幅中々能く出來て居きすナニ
玉樂は永德の弟子で有ふと誰か左樣に申されましたか或
る新聞屋が申ましたト其い抱腹千万其で五坐るうら今
時の學者い役に立ませぬ一休狩野家でも玉樂が流と永德
が筆れ跡とい最も違て居りまする玉樂い古法眼と言れた
元信の弟子ゐして永德は元信の三男松榮の子で五座る此
れ人一派を書き出されて右近、探幽なぞト有名な人も出ま
した玉樂もまた此流より出て一派を立られ元龜天正の頃
小田原の北條家に仕へて天下よ聞た人で五坐るから全く
時代が違ひまそ全体狩野家ゐい元祖正信以來名人も多ふ
御坐るが永德が一派を立られた後ち探幽の弟尙信もまた
一派を立られ其所で家が三ッよ分れた樣ゐ者じやナニ繪
の家は其だけかトどうして〳〵第一古いけゞ土佐家元祖
は土佐守經隆次が行光、光重、廣周、光信、光茂など云ふ、外よい
東福寺の兆典子が書出された明兆派、巨勢金岡派、仁安の頃

の鳥羽流明より渡つた秀文、天龍寺の玉畹子、然可翁、雪舟、雪村、周徳、英一蝶、あぜゐろ〳〵ある其派を立た中よ重立さ人々はみにても斯は如し中々數ひ切れた者でとあい、其ハ、ァ許六が筆成程是と面白い手紙らしいが眞物らしい許六ハ蕉門は十哲と言て俳諧の方では貴重される人物よナニ誰れ弟子だト今も言た通り蕉門の十哲とて芭蕉の門弟中で寶井其角、嵐雪、支考、丈草、許六、去來、野坡、北枝、杉風、越人あどと十人を十哲と言れさ組ッ皆あ當時の名人で他る中よも其角は江戸風とて一流を起し杉風は正風を弘むるに力を盡した人物でゐる後世、此の流義の天下よ廣まつたハ全く十弟子の力だ己は江戸流とて其角の流と酌むが斯道よも入て見ると淡林、蕉風、伊勢、美濃なぞとて流義さいろ〳〵ある其講釋を言、初めた日よハ一朝一夕れ事よあらぢサ、此の幅なそも矢張り茶道向きであるどうりで探幽守信の筆である此人ハ茶もよくせられて隨分達人であつたさうなェナニ已ハ茶ハ余り好ぬが其でも一通りハ心得て居るがマッ此道でハ珠光を以て始祖とし次が東山天山公、引拙、宗理、宗陳、紹鷗、宗風と來て次が千宗易である此人中興の業と成して其より弘まつたのであるが古と大名に此道れ上手が有て前田德善、松永彈正、古田織部、小堀遠江、同大膳、細川三齋、金森宗和あど皆〳〵貴族であつた其より肖栢老人、光琳、昭乘、道三あとゝて名人も出た事だ何でも是ばかりと大名か豪富であくてハ數寄を尽そ譯にもゆかぢ道具が第一集らぬで本眞の樂みは出來ぬ一体茶と言ふものハ强ち

道具を捻くるゞ本意でも有まいゞッ是が專らとありて古いもの〳〵でかためたのだから吾々貧生には及バぬテ底へいつても樂めるものゝ樂だテ樂と言てゝ君達にハ分るめへが樂の沿革を話して聞せる迄もあい日本の樂と支那の樂と二通りあるが神樂と言ふものは吾國の樂の初めで有る此事は白石の遺稿よくハしいゝら今言迄もあいが先つ和琴琵琶なそが第一であるが己が平世樂しむ所ゝ箏樂と琵琶である獨樂ゝは此上のなきものぢや今よく月琴やら一絃琴なぞを玩ぶゞどうも俗で聞れぬ第一ゝ毛唐人の寐言だから感心せぬテ、圍碁ハ遊藝中でハ最も樂みあるのゝならゞ古く傳ゝりてよい者あをど獨樂が出來ぬから不便じやナニ碁のいわれを聞さいト何も別に講釋もあい

が盤は立一尺四寸にして横一尺三寸目ゝ七分にて一年三百六十五日を象り碁笥ハ日月に擬して黑白は晝と夜とを見し、聖目ハ九星を表して最も貴重なり圍碁式よハ九星の事由來分明ならずと有て喜多村翁の說でハ九ッを星目と言ゝ誤なり一ッにても星目あり今碁を打を見るに皆星目をさけて打、古法と同しからゞとあるが何れが本の說なるや知れず碁の事は今昔物語にも源氏花の宴の卷にもあれば古へより開けたると見ゆるが己ハ余り打ぬから悪しく も調べぬが喜遊笑覽でも見れば悪しく分るで有ふ、よくいろ〳〵な事を知て居ると是ハしたゞ己の知らぬ事ハ恐らく世の中よ有るまい然し余り百科の技術に達し過ると世間が馬鹿に見て困るよ先つ遊藝も一通りは學で置さゞバ何

を望まれても屁込む苦勞はない學問も諸子百科よ渉て居るが今日でも先つ第一よ文章が緊要で有ふテ今の書生が書く文と來たら滅茶〳〵で更よ文章の体もなく只字をならべたと言ふ迄よ實よ歎かわしい事である必竟今の人間と本式よ勉強せぞ只外部許り飾つて胡魔菓子をやらゥすから で有る清の歸震川は近代の大家よて能く文章よ通じて居たぞあの男の文章を讀位に目が利は余程いゝ日本では山陽だの、竹堂だと言が日本人れ文わ何分にも臭氣が有て何分にも秦漢の文法を得ぬ様である何を言ても唐宋の頃だテあの時は已に一變して居るぞまた〳〵近代の臭氣文章といわ違ふテ今の學者わ人物からして屁子〳〵たる人物であるゥら碌な文の出來る氣支なしサ、己が舊て文章改革を

主張する日にわ天下靡然として應そるに疑ひなしだか今商業がいそがしいから其の暇もなし、其に實わ內職よ翻譯をして居るから大部いろがしいテ少玄閑を得さら文章改革を唱へて漢學の眞面目を表陽てやりたいと思て居るが整いよ高尙の說を吐ても今の奴等ア皆な酔て居るから解らぞサ世間皆な汚をぞ吾を獨り清りサなんと余り難も學ぶ可らぞサ吾輩なぞわ世間ゲ馬鹿よ見へて困ると言ふのだから是にわトント致方がない深山に隱きて仙人を友とするより外なしよ今見た書畫は賣物ゥの、ッム己も此位の畫わ書が世間の奴ア昔の人物でなくてわ永知玄ねへから可笑いナニ探幽、元信、知れよ者サ、イヤ、言のを忘れたが汕繪も望そならば書てやりまず誰ろ欲しい人がゆらぞ周旋して

呉れ玉へ石版畫も道具を持て來れも書てもよいいゝ
ゝ余り藝が多いと矢張り貧乏だト是いしたり余り人物が
高過るゝら貧乏するのてある己の才を以て世に媚び時ま
阿り朱門高堂に出入して其意を迎ふる日ま い捨賣にして
も眼合おものいゐる、マッ〳〵時の至るを待て草莽に隠れ
そもよいでいないか吾々の如き豪傑が民間に居らぬト何
とおく朝野の人才平均を失ひ頭大振いもイヤ頭大でいな
い尾大振いもでとゐい頭勝の形て國の爲でないテ、おんだ
ト一藝に名ある者い必も採用せられる時節だゝら萬藝に
名ある者と大に採用せられ可き筈だト是と去たりどうも
足下と一を知て二を知らぬト言ふもの一藝々出來る位の
人物ならば採用しても使役する事が出來やうが、己の樣に
万藝ま通じた者と上でも使ひきれないのだワ
晴亭云奇談初篇稿を脱も、余此の編を草はるま當りて己
に胸中に十七件の奇談を蓄ひぬ、筆を執て机に臨むに及
でい僅ま文章を寫はに過も書肆出版の豫算己ま紙數限
あり故に悉く胸中を盡す事能と也依て先に本篇を上木
し更ま他日續編ま及ばんと欲するなり

明治新話抱腹奇談終

明治十六年七月五日出版御届
同　年同月十六日出版

著者　長野縣士族　小柳津親雄
　　本郷三組町壱壹番地寄留
　　東京府平民　横田兼太郎
　　神田區五軒町二十番地
出板人　松江堂
　　神田區一ッ橋通壹丁目五番地

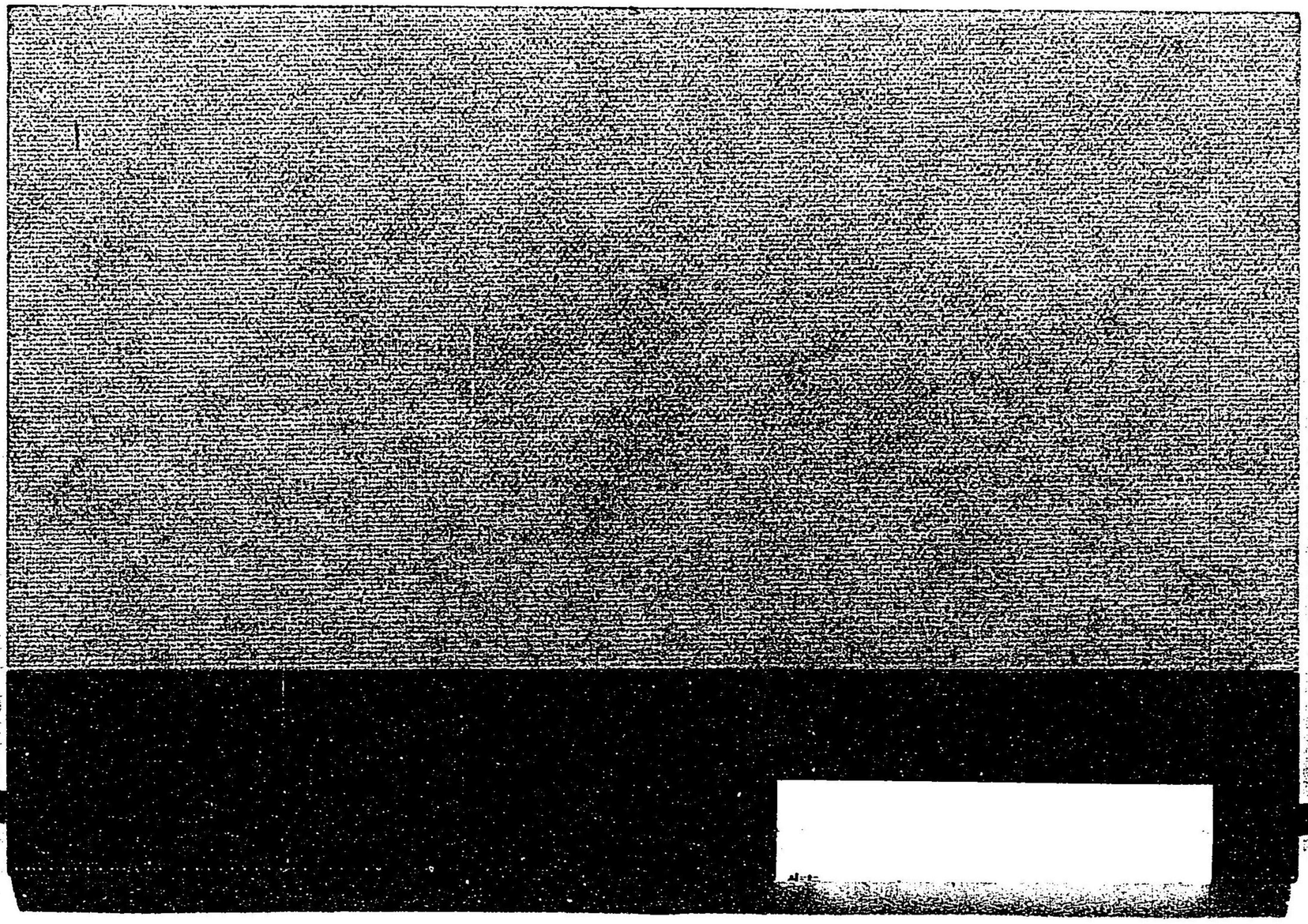
發兌　東京芝三島町　和泉屋市兵衛
同　日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　芝柴井町　土屋忠兵衛
同　日本橋通三丁目　丸善書肆
同　芝露月町　鏡兎屋錦堂
同　南鍋町　嚴々堂誠
同　神田雉子町　法木德兵衛
同　元大坂町　秩山堂
同　神田表神保町

賣捌所　神田五軒町女神散本舗　佐々木榮次郎
淺草茅町二丁目　北澤藏
日本橋室町　武萬字屋
京橋區木挽町　鶴聲社
神田區一ッ橋通　稻滑堂
室町三丁目　岡島真七
大坂本町四丁目　梅原藏
西京備後町四丁目　伊勢屋梅堂
横濱太田町一丁目　青雲堂
信州松本中町

（定價金貳拾八錢）

甲府柳町　微古堂
信州松本町二丁目　高美屋甚右衛門
同　藤喜
越後三條　麺口小左衛門
加賀金澤　近八郎右衛門
薩州鹿兒島　吉田善兵衛

西京三條通堺町　出雲屋文二郎
陸前仙台大町　木村文助
同　石卷裏町　三陸利兵衛
陸前古川　日新堂
房州那古村　外山寅吉



特10
330

抱腹奇談

国立国会図書館

091872-000-4

特10-330

抱腹奇談（明治新語）

晴亭　柳窓／著

M16

DBO-0404